自主シンポジウムⅠ：青年の理解とその方法論について

オーガナイザー

寺田 晃（東北大学）

提案者 久世 敏雄（名古屋大学）

佐藤 克夫（宮城教育大学）

国眼 真理子（東京学芸大学）

坂田 健（岐阜大学）

最初にオーガナイザー（寺田）から、本シンポジウムが、埼玉大学での自主シンポジウム「青年心理学の方法論」の発展であると共に、青年理解のための方法として先回に打ち出した7方法を4方法にまとめ、科学研究費による共同研究の成果をも含めて、方法論としての総合的な体系化を期する主旨で企画されたとの説明がなされた。

各提案者の発表内容は、あらまし次のとおりである（各提案者の記述を中心とする）。

久世敏雄：（質問紙調査法的アプローチ）：

青年期は、人生観確立の時間的余裕をもたない高校生活の卒業を境に、勤労青年と大学生の2群に分かれる。中学生および高校生は、成長のspurtの時期であり、生理的变化に伴う適応の問題に直面する。一方、大学生とそれに続く時期は、自己と社会との間の緊張・葛藤に直面する時期である。

いま、かりに12、3歳から17、8歳までを青年期（adolescence）、18、9歳から24、5歳～30歳までをyouthとよぶならば、青年の理解とは、2つの青年期の分岐点となる人生選択の要因が何であり、その後の人格形成の過程がいかなるものであるかを明かにすることとなる。換言すれば、青年期の特徴は何か、youthの特徴は何かを理解することである。

これらの2群の青年を理解するさい、青年一般を理解すると同時に、青年個人を理解することが必要である。青年一般を理解することは、研究の狙いが法則定立的な目的をもつことであり、また、青年個人を理解することは個性記述的な目的をもつことである。青年心理の研究では、この両者のそれぞれの長所を最大限に生かすことが必要であり、このための方法は、両者を交互に組合せることである。この組合せの方法には、青年一般—青年個人—青年一般という3段階法と青年個人—青年一般—青年個人という3段階法とがある。青年心理研究において、このいずれを採用するかは、研究の目標と関連する。

次に、青年理解にさいしては、発達過程・人格形成を明かにする視点が重要である。この視点は、従来、発達の連続性、非連続性の問題として提起されてきた。人間の発達が連続的なものであるか否かは、モデルによって異なっている。青年期に疾風怒涛の現象がみられるか否かを明らかにするためには、縦断的研究により、同一個人を継続的に追跡することが必要である。このさい、発達・人格形成の目標が問題となる。自己実現を果たし、自己決定の可能な青年、無限の潜在的可能性、成長可能性に能動的に参加する青年、こういった青年が目標となる。なお青年の発達・人格形成に関連して、行動発達のどの側面を検討するか、いわば行動の母域を確定することも必要である。

これらの視点から青年の理解に迫るとき、質問紙調査法的アプローチは、青年心理研究における3段階分析法において、青年一般の理解に役立つものである。このアプローチは、青年一般の理解が実態調査的水準であれ、仮説検討の水準であれ、強力な武器となる。

次に、このアプローチにおいて、質問紙法を縦断的に使用することにより、青年の発達過程を分析することができる。

このように、質問紙調査法的アプローチは、青年一般の理解および発達過程の分析に有効な手段であるが、このアプローチでは、個別理解に迫るデータは得にくく、このためには、他の方法、技術を援用することが必要となる。

佐藤克夫：（実験観察法的アプローチ）：

青年研究は、青年の行動や意識の実態を把え把すること、さらにその行動や意識の発達の過程を理解することにある。これについては、端的に質問紙調査法や面接調査法が有効であるが、それらの方法は、青年の実態や発達の姿を、比較的巨視的にとらえるものであり、しかも研究者主導による方法にはなり得ない。したがって、青年の行動や意識の発生に関する因果関係を理解するという要請にこたえて、いわゆる実験法が必要となる。

具体的な方法としては、「語いの認知関」に関する研究手続、アイカメラによる「青年の写真鑑賞」の研究におけるそれがあげられる。われわれは、これまでに青年を対象とした実験法の研究としてそれらを展開してきたが、例を後者の研究にとれば、統制された条件下では、興味、関心のない写真には、アイマークの軌

跡がなく、青年独自の一定の傾向をとらえることができた。その意味で、青年の内的な心的活動を、条件分析的にとらえることは可能であると共に、方法として有効なものと考えている。

しかしながら、それにしても青年心理学における実験に、自然科学でのそのような完全な条件統制を期待することはできない。トーマス、H が述べているように、それは、実験法とはいっても、あくまで「観察条件の統制がかなりきく」という域でのものとなろう。青年の心的活動の特徴を、仮説検証的にその因果関係を明確にすることが必要であり、そこに実験観察的アプローチの意義が方法論として浮上してくるものの、方法としては、以上の点に留意することが大切ということになろう。

国眼真理子：(指導観察的アプローチ)：

本アプローチは、① 青年との直接的なかかわりの中で、青年の示す行動の意味を深く追求する、② かかわりの過程で、青年は自己理解を、研究者は青年理解を深める、③ 究極的に青年の自己実現みはかる等を目的とする。その特質は、① 直接的でしかも継続的に青年とのかかわりをもつ、② 青年が持つ問題の解決を糸口にしてかかわる、③ 青年のもつ個別理解に基づいて働きかけ、その働きかけの結果、明らかにされる事実により個別理解を深める、このサイクルを繰り返す、⑤ 個別理解に基づき、最終的に治療的働きかけの手掛りとなるような一般法則定立をめざす、⑥ 研究者がチームを構成することによって多面的理解と多様な働きかけを行うなどの6点にある。なお、これらのうち、昨年来更に事例研究を重ねる過程でとりわけ重要な特質として浮上してきたのが、①、②および⑤である。

① に関していえば、ひとつには青年の行動の変容および行動に附与する意味の変容をさぐることができる、ふたつには青年の提起した問題の本質、背景をたどることができるという利点がある。②の特質は、青年自身の自我関与を高める上に欠くことができない。自我関与というとき、青年みずからがもつ課題の解決に関する自我関与と、かかわり合う人間関係に関する自我関与とのふたつがあらうが、いずれも青年研究を進める上で、妥当な青年理解を行っていく上で、無視できない重要な要因である。本アプローチでは、当面青年の自我関与を高めるひとつの方策としてこの特質・方法を用いる。⑤の特質は、本アプローチの今後の課題とも言えるが、単に青年について個別的理解を深めるにとどまらず、いかなる青年に、いかなる事態

でどう働きかけたならば所与の課題解決が可能か、またその解決過程での青年の自己実現が可能であるか等について、治療的な手掛りとも言うべき法則定立をめざしていることを意味する。

以上あげた観点・特質により、本アプローチでは、青年の存在を細かに分断してしまうことなく、全体的な把握をねらっている。

なお、このような青年理解の方法をとるに当たり、われわれは発達目標としての青年を次のように描く。すなわちそれは、環境および自己に関する的確な認知に基づき自己決定が可能な青年であり、環境に対し積極的に働きかけていくことができる青年である。本アプローチでは、この方向をめざし青年とのかかわりを続けると共に、青年がみずからこの方向をめざし始めたときをもって関係終結の基準としている。

最後に、今後の課題として残されている問題を2、3あげる。①「自己決定」あるいは「自己実現」とはいかなる状況、事態を意味するのかを更に吟味する、② 個別的理解から青年の一般理解へといかにして視野を拡大していくかを検討する、③ 研究者と青年とのかかわりの中で、青年自身が気づかない問題をどう自覚させるかを考える、以上3点が、今後本アプローチにより事例研究を重ねる中で検討、吟味されるべき課題である。

坂田 健：(現象学的アプローチ)：

1. 心理学の科学性 現代の正統派(自然科学的)心理学は、合理性、客観性を指標とする実証科学をめざしている。それは物理学をモデルにして、複雑な人間の事象もできるだけ単純な要求に還元する。そこには、人間をものと本質的に同じものとみる自然科学的態度がある。

このような方法だけが、心理学的研究法の名に値するもの、青年の心にせまるふさわしいものとは思えない。

2. 現象学的方法 このような科学通念についての信仰を一度疑い、適切な方法を自覚的に行使しようとするものである。これまでの経験的心理学は、常識的に漠然と理解している概念、言葉を手がかりとし、これらのものが指示している事象の本質を吟味することがおろそかにされている。現象学的方法は、直観的方法で心理現象の本質にせまり、それを記述しようとする。先入見を排し、経験に与えられるままの具体的事象へ立ち還り、すべてを問いなおそうとするものである。

そのために、さし当りは次のような点を中心に研

究を進める。

① 志向性 意識(経験)の本質を志向性としてとらえ、意識は必ずあるものについて意識として、己れのそとに己れならぬあるものを己れの対象としてもつ、それをフッサールの言うノエシス(意識すること)と、ノエマ(意識されるもの)という2つの不可分な環として経験、心理をとらえようとする。

これは更に心理現象のそれぞれの領域で固有に営まれている現象の志向性を明らかにし、それらの志向性に共通の意味方向を見出すことでもある。青年が世界(生活空間)に向かって何事かを企てようとしているその様態の示す志向性をとらえようとする。それは青年心理学に目的論的視点をとり入れ、現実の青年の行動、経験がどこに向かって進み、企てられているかを明かにしようとする。

② 全体的、構造的把握 青年の示す現象とその背後にある人格的背景とを直観することから全体的構造特徴をとらえる方向をめざす。

③ 了解と解釈 これまでの青年心理学では、説明的方法を解釈と称し、恣意的にこれを行ってきたきらいがある。

解釈学的現象学の解釈は、解釈に先立ち、非表明的に漠然とし了解されていることがらを、主題的に浮かび上がらせ、明るみに持ちきたし、明らかな概念として仕上げることである。

具体的な研究としては、青年の手記、FAT, 20 答法などで得られた材料について、上述のような方法を適用し、分析を進めている。

以上、4 提案者の報告を受けて質疑応答に入った。まず和田(日赤)から、青年を理解する場合に、時代的・社会的な状況把握が必要とされる理由について質疑があり、久世が、それを受けて、現代青年のおかれている社会的背景と、行動の解析と理解にそれが不可欠な条件であることを説明した。また高山(秋田大)より、国眼に対し、「指導観察的アプローチ」が青年研究法の

ひとつであるとしても、そこには臨床心理学の方法としての意味あい濃厚であり、したがって方法上、青年心理学と臨床心理学との関係ならびに区別をいかにつけるのかとの問いが出された。これに対し国眼は、同方法と臨床心理学での教育相談との差違を中心とした特質を再度指摘した(青年とのかかわりをもって青年を理解するという点で、同方法は、場合によって臨床心理学をも包含するものであることを強調した。4 アプローチによる提案は、おおむね「方法論」としての陳述を行ったのであったが、続いて西平(山梨大)より、返田に対し、青年理解には確かな「方法論」が根底になくはならず、したがって「方法論」と「方法」とが区別されるべきであるが、その点で当該提案はいずれを強調するものであるかとの質疑がなされた。これに対し返田は、提案の陳述が、たんに技術的な方法としてではなく、「方法論」をふまえたものであると答えた。また同質疑については、そのあと久世、佐藤、国眼らが応答し、西平も再度意見を交換するなど、活発な討議が展開された。

西平の質疑は、本シンポジウムに限らず、青年研究の一般としても考慮すべき重要な基礎的事項であったため、特にフロアの関心をかい、また松本(東北大)から、第2信号系にかかわる視点、教育ならびに発達(歴史的)の観点に拠して、青年心理一般を検索していくべき旨など、示唆が提供されたが、時間的な制限もあって、それぞれの提案について、いわゆる「方法論」としての理論的な確認は今後に残された。

しかし青年心理学の研究法として、技法と理論とに一脈の有機的な整理と総合化が得られた点で、本シンポジウムは、きわめて有効かつ意義あるものになったと言えよう。ここでは4つの方法論ないしその具体的な技法がとりあげられたが、今後は、それらを擁して、青年のある特定の行動的典型を多面的に検討し、各方法論ないし方法の内容を一そう深化させていくと共に、相互間の体系化を定立することが課題となった。

(寺田 晃)

Ishii reported from his many years' experience that the important thing in the education including therapy and training for autistic children was to improve the human relationship between therapist and children.

The authors concluded: the therapeutic approach to the behavior handicapped children was discussed among the members, but no integrated conclusion was reached. Perhaps there were among the members some differences of views on handicapped children. Sufficient study should be given not only to the change of behavior but to the formation of the inner world of the handicapped children, and in the study we should consider a handicapped child as a whole person.

Independent Symposium I

ON UNDERSTANDING ADOLESCENTS AND ITS PSYCHOLOGICAL METHODOLOGY

Organizer: A. Terada (Tohoku University)
Symposist: T. Kuze (Nagoya University)
K. Sato (Miyagi University of Education)
M. Kokugan (Tokyo University of Arts And Sciences)
T. Sorita (Gifu University)

The aim of this symposium was to make clear our problems about methodology of psychology of adolescence, and examine the general systematization among the methods taken up by four symposists.

T. Kuze stressed the significance of the questionnaire method, and clarified that the approach would be quite effective in order to see the behavioral traits of adolescents in general, while presenting some concrete data.

K. Sato emphasized the necessity of the experimental method especially in order to see the causality in behavioral development of adolescents. He pointed out, however, that questionnaires and other methods should be used at the same time.

M. Kokugan spoke on the characteristics of directive observational method, and examined the possibility and the significance of understanding adolescents in helping them to solve their urgent and current problems.

T. Sorita explained the meaning and the necessity of phenomenological approach to understand the essential traits of behavior by using their notes and other data, and to understand the structure of adolescent personality in general.

After these presentations, A. Terada emphasized that these approaches of methods had to be integrated and much systematized in the future, and commented on some concrete planning.